2013年12月22日 クリスマス礼拝
説教　光の到来
ヨハネの福音書1章1－5、9-14節

クリスマスおめでとうございます。今朝、ごいっしょに「まことの光」である主イエスを喜ぶことができることに感謝したいと思います。

【信じるとはどういうことですか】

まだ主イエスを受け入れておられない方からの、よくある質問に「信じるとはどういうことですか」というのがあります。私も実家で先に救われた家族に、この質問をしましたがなかなか要領を得ませんでした。

【私の夜明け】

「信じるとはどういうことか」がわかったのは、自分が信じたとき。それは夜明けに似ていました。闇の中では何も見えませんが、だんだんと夜が明けて来ると、自分のいる場所の様子が分かってきます。そして、いつの間にか明るい朝の光の中にいる自分に気がつくのです。

私の夜明けは、自分の中にある「かたくなさ」や「いじけたところ」に気がつくようになったことで始まりました。それ自体は罪とは呼べないかもしれませんが、そういう自分の中にある歪みのようなものが、自分も、そして自分だけではなく、まわりの人も不幸にしていることが、わかり、そこから目をそむけられなくなったのです。これは自分ではどうすることもできない、手に負えない問題だと分かった私は教会へ行きました。魂の医者である主イエスのところに行こうと思ったのです。

そこで森文彦先生としばらく話すうちに、私の心を照らし始めていた夜明けの光はどんどん輝きを増しました。そして主イエスの十字架が語られたときに、私は腑に落ちました。私のこの罪深い歪みのために、自分ではどうしようもない歪みのために主イエスが十字架に架かってくださったと納得が訪れました。いろいろな形をしたジグソーパズルがぴたりと収まるように私の中で主イエスがかみ合った、そういうことが起こった。「信じるということはどういうことなのか」がわかりました。それは私の中でひとつの「できごと」が起こることでした。それまでぼんやりと私を照らし始めていた光が、私に出会ってくださるという「できごと」が起こること、それが救いでした。なぜ、家族が「信じること」や「救われること」をはっきりと説明することができなかったかが、今はよくわかります。彼らは、主イエスに会うという「できごと」を体験したからです。私もまたその体験をすることができたのでした。

【クリスマスの愛】

クリスマスには大切なことがもうひとつあります。私たちが救われるために、神さまが大きな犠牲を払ってくださったことです。御子を私たちに与えくださったのです。神さまは私たちをあわれむあまり、苦しみを選び取ってくださいました。神の愛は単なる情緒的な愛ではありません。神さまは私たちのことを好きだ、というだけではないのです。神の愛は行動する愛。ご自分を与える愛です。それがクリスマスに現れた神の愛なのです。

【アメイジング・グレイス】

この光によって照らされ、暗闇の生活から救い出された人のひとりに、ジョン・ニュートンがいます。奴隷輸送船の船長であった彼は、後に牧師となり、「アメイジング・グレイス」の作詞をします。「驚くほどの恵み･･･私のような哀れな男を救って下さったとは。かつては失われていた者が、今は神に見い出された。かつては目が見えなかったが、今は見えるようになった」と。彼の歌う「驚くほどの恵み」が何を意味していたのかは、彼の遺言状により明らかに記されています。「私が背教者であり、神を冒涜する者であり、不信者であった時、情け深くも私を赦し、守って･･･くださった神･･･と救い主に私は魂を委ねます。わずかばかりの確信を持って、神であり人間である主イエス・キリストの十字架の罪の贖いと和解に信頼を寄せています」と。

【完全防水加工？】

ある牧師が完全防水加工を施した心となることがないようにと語りました。それは神の恵みを受け付けない心のことです。みなさんに祝福がありますように。